

体育の指導過程についての一考察

— 特に球技を中心として —

永 井 康 宏

1. 体育——運動による学習，人間生成の体制化

体操，遊戯，スポーツ，ダンスなどの大筋を活潑に動かす全身運動は，適切に行なうと，健康の保持増進，身体の成長発達に役立つのみならず，態度や性格の形成にもよい影響があると，経験的に，古くからも，信じられていた。言いかえれば，運動を行なうことによって人間は人間らしい生き方を学習し，一層人間らしい人間になるというのである。この見解はなお検討を要する多くの細かい点を含んではいるが，現在ではしだいにその妥当性が科学的に実証されるようになってきている⁽¹⁾。運動を行なうことによって人間が成長したり，学習したりするのは自然事実なのであり，教育を未成熟な個体の成長を，望ましい成熟の姿にまで助成し，指導するはたらきと定義するなら，運動には教育的な機能が伴うといえるのである。

一方，運動は，行ない方が適切でないと，健康を害ねたり，健全な発育発達を阻害したり，好ましくない態度や性格の形成に導いたりすることがあるのも⁽²⁾，また，一般に認められている事実である。

このような，行ない方の適，不適によって，運動は教育的な結果をも，非教育的な結果をも招来するという自然事実にもとづいて，それに一定の方向を与えるという形で，教育的な機能を確実なものにしようという試み，それが体育である。それゆえ，体育は，運動による成長や学習の事実に着目して，これを意識的，意図的さらには計画的に体制化していくときに成立する。運動を行なわない体育ということはあり得ないが，といって，単に運動を行なうだけでは

体育とはいえない。運動が教育的な機能を果たすように行なわれなければ体育ではない。体育は「運動をする」あるいは「運動をさせる」ことが教育的な価値に結びつくのでなければならぬのである。

2. 体育の学習（指導）内容——運動の可能的価値

運動を行なうことによって実現しうる価値は，別の観点からすれば，体育で学習，あるいは指導すべき内容である。巨視的には体育の目標である。

このような価値についての具体的な見解は，運動の機能，効果に対する認識の態度や方法，たとえば単なる主観的な信念による場合，個人的な経験に基づく場合，科学的認識による場合などによって多少異なり，また社会的あるいは思想的な立場の相違などによっても異なるので，過去においても一定ではなかったが，現在でも必ずしも一定してはいない。けれども現在では一般に，運動主体としての個人を社会＝個人的見地 socio-humanistic point of view（社会文化の存続発展と個人の成長発達は相互に媒介されるものであると見る）から全体的に把握し，社会文化の存続発展の担い手としての個人の幸福をはかるという立場から，運動によって達成あるいは学習可能な内容 Potential values（可能的価値）⁽³⁾として次のようなものがあげられ，多くの人々によって認められている。

(1) 身体的発達

⑦ 器官の発達，成長

⑧ 体力（器官力）の発達

(2) 運動技能の発達，運動文化の獲得

(3) レクリエーション機能

- (4) 社会的適応, 調整力の発達, 性格の発達
 (5) (1)―(4)に関する知識や思考や判断力の発達

しかしながら, これらの可能的価値の中には, 実現と達成が比較的容易でかつ直接的なものもあれば, 長い期間にわたらないとできないもの, また間接的にしか達成できないものもあり, 実現とか達成の困難さは一様ではない。

また, 一般に価値観は社会の思想や政治体制その他, いわゆる歴史的現実の条件によって異ってくるので, これらのおのおのがすべての社会でひとしく同等の価値と認められるとは限らない。例えば, 社会主義体制のソ連や中共では, 国防と生産のための体づくり(身体的発達)が最も強調されており⁽⁴⁾, 商業娯楽や余暇産業が高度に発達している資本主義体制の米国では, 社会教育的立場からの必要もあって, 運動のレクリエーション機能が社会主義体制諸国以上に強調されている⁽⁵⁾。また, 最近のわが国では, 各種の競技会や国際試合, それを支えるスポーツ・マスコミの影響によってスポーツ技能が不当に尊重されるようなムードにある⁽⁶⁾。

さらにこれらのおのおのは, 個人の生命史的現実(発達段階)によっても必ずしも等価値ではない。例えば人間の一生を通じて身体運動の可能な時期を, 成長期, 成人期, 老人期の三期に大別し, 各期における運動の可能的価値を概観すると次のようになるからである。

(1) 成長期(幼児期→青年期)

- ㊦ 身体的発達
- ㊧ 運動技能の発達
- ㊨ レクリエーション機能
- ㊩ 社会的適応調整能の発達
- ㊪ ㊦―㊩に関する知識, 思考力, 判断力の発達

(2) 成人期

- ㊦ 快適な健康, 活動力, 生産力の維持
- ㊧ 楽しい生活の維持(レクリエーション)

(3) 老人期

- ㊦ 気持のよい余生を送る。(保健, レクリエーション)

成長期をさらに幼児, 児童, 青年の各期に分けてみると次のようになる。

幼児期

- ㊦ 成長発達の促進 ㊧ 身体支配力, 生活能力の向上

児童期

- ㊦ 身体的発達 ㊧ 生活態度の育成 ㊨ 社会的調整能力の発達

青年前期

- ㊦ 身体的発達(形態発達のバランス) ㊧ 技術的な運動文化の獲得 ㊨ 社会的適応調整能の発達 ㊩ レクリエーション機能(過剰エネルギーの発散)

青年後期

- ㊦ 身体的発達, 体力(筋力, 持久力)の発達 ㊧ 力的, 持久的各種運動文化の獲得 ㊨ 社会的適応調整能の発達 ㊩ レクリエーション機能

それゆえ, 先にあげた可能的価値のすべてが, そのまま体育の目標や指導(学習)内容として, どこでも, また, だれにでも取上げられ, 同じウエイトで扱われるわけではない。それらが, 具体的な体育の目標や内容となるには社会の歴史的現実の条件や体育の対象(運動主体)の発達段階などによって検討された上で具体的な内容が組織されなければならない。

具体的な内容を組織する場合最も問題になるのは, どのような種類の運動を選ぶかということである。体育では, 学ぶべき運動文化, 運動技能の具体的な対象(内容)として運動の種類を決定しなければならない。すなわち運動は学習の目標であり, 内容である。と同時に選ばれ決定された運動の種類によって, 身体的発達, レクリエーション機能, 社会的調整能等一切の可能的価値の具体的な内容や限界が, 実質的には, おのづから決まってしまう。すなわち運動は教材(教育の手段, 材料)でもあるので, 教材に運動文化財(運動)を選ぶことによって, 逆に教材(運動文化財, 運動)が体育の方向や様相を根本的に規定してしまうのである。

それゆえ, 運動の選択は極めて慎重であるべきである。運動文化財の中には体育のために創られたものもあるが, スポーツやダンスの大部分は, それ自体の立場(興味, 関心, 要求)で発達したものであり, それはそれ自身で存在価

値がある。そしてそれらにも教育的にすぐれた価値をもつものがあることも事実である。けれども体育の内容や教材として取り上げる場合には何等かの形で考慮しなければならない点（主として学習者の発達や社会的影響に対する配慮から）があるのも事実である。それゆえ既成の運動文化財を、体育の内容として取り入れる場合には、運動主体に対し教育的意味があるように改造（創造）するなどの配慮が当然必要になる¹⁹。既成運動文化財としてのスポーツやダンスを、そのままの形で学習させるのは、運動主体が生理的にも心理的にも社会的にも、学習しうる態度になってからでないと弊害が多いであろう。

体育では運動によって実現可能な諸価値を顕現していくことによって、社会＝個人的見地から描かれる理想の人間像との対比において、個人々人を、個性豊かな人間に育てようとする。それゆえ体育では運動文化の発達や発展を決して否定するのではない。むしろ運動文化の学習や創造を通して人間形成が行なわれるのであるから、人間を育てることと運動文化の発展とが一致する限りは大いに運動文化の発展を企図すべきである。しかし運動文化の発展が必ずしも人間を望ましい姿に育てることに一致しない場合には、体育では人間を人間らしく育てることを優先的に考えなければならない。体育の内容あるいは教材としての運動（文化）もそのような人間育成、人間尊重の立場から選び、決定すべきであって、特定の運動文化群の発展の立場から選ぶべきではない。

3. 体育の指導過程

指導過程とは教師が、意図的に運動主体の運動学習を指導する過程である。教授過程ともいわれるが「教授」という場合には認識にかなりウエイトが置かれるようなニュアンスがあるので、ここでは指導過程という言葉を用いる。

指導過程は、指導が学習に関連したものであるように、学習過程と関連したものである。しかし指導がなくても、せぜんになされる学習もあるので、そのような学習（あるいは学習過程）

との関係からいえば、指導過程は、「学習が能率的、効果的に行なわれるように、意識的、意図的、計画的に再構成した学習過程」であるといえよう。

したがって、指導の過程を考えるにはまず、せぜんに行なわれる運動によっての学習（運動学習）の過程を明にすることが必要であろう。

(1) 運動学習の構造分析

運動を通して学習される可能的価値には運動技術（文化）を始めいろいろなものがあることは先に述べた通りである。そしてこれらの内容が学ばれる状況は決して単純なものではない。けれども運動を行なう動機がどのようであろうと、（例えば体をよくしたい、すぐれた体力をもちたい、仲間に入りたい、他人に認められたい、うまくなりたいたいなどのように）運動する者の直接的努力の対象は常に運動技能であろう。すなわち一定のパターンの運動ができるかできないか、いかに速く、高く、遠く強く、回数多く、うまくできるか、競争やゲームで勝つことができるかなどに直接的な注意と関心が向けられるであろう。なぜならば人間が行なう行動や運動は、必ず身体を通して表現され、技術的であり、われわれはこのような身体を通じて表現された形（フォーム）や、記録や、技術（技能）を指標としてしか、自分の健康状態も、体力も、また態度さえも、知ることができないからである。すなわち、健康も体力も態度も客観的に表現されないと真の相をつかむことはできないが、運動ではそれらがすべて記録や技術として客観的に表現されてくる。

例えば体に異常があったり、健康でなかったら、運動を活潑に行なうことや、巧みに行なうことができないし、体力が落ちたら運動を以前より速く、あるいは高く、遠く、強く、回数多く行なうことができない。また、気力がなかったら能力があっても、競争に勝てないなどがそれである。そしてわれわれはそのような運動に表現された技術や記録から逆に、健康や体力や態度を推知している。それゆえ運動するものは直接的には記録やフォーム、またそれを生み出す技能を目指して運動せざるを得なくなるのだ。

そしてこのような運動技能の獲得向上のために、それに関係あるいろいろな知識が、探求されて、運動や練習を通して（実験的に）確められ（学習され）たり、運動や練習によって発見された新しい事実から新しい知識の学習がなされたりする。態度も、（学習の初めにすでに何等かの程度と形に形成されているに違いないが）技能獲得の練習を通して、運動技能の側面としてあるいは学習態度として、一層実践的、現実的なものへ統合的に発達していく⁽⁶⁾。

このように運動学習では、何らかの動機にもとづいて、ある運動が選ばれ、それによって欲求を充たすために必要な知識が求められ、直接的には運動技能の獲得、向上をめざして運動（練習）が行なわれ、それに伴って運動技能の上達、運動文化の獲得、身体の発達、態度の形成、知識の獲得等が、相互に密接に関連し合っ、て、しだいに達成されていく。そして、そこでは知識や態度が単なる知識として、あるいは現実的行為に無関係な態度として形成されるのではなく、つねに運動技能（人間的な力の総合的あるいは象徴的表現である）の追求と表現に結集、統一されて認識され形成されている。それだけに逆に言えば、特定の運動技能の獲得や上達のみ専心していれば極めて狭い範囲の認識や、特殊な態度や性格にしか達し得ない場合もある⁽⁷⁾。しかし知行一体的な運動技能の学習を深化することによって、他では容易に達し得ない人間性や人間関係の深い理解に達することも可能なのである。

(2) 体育学習内容の取扱い方

しぜんに行なわれる運動学習の分析から、体育の指導における学習内容の取扱い方を極めて大づかみに言うなら、運動技能の指導を出発とした中軸として進め、それに伴って必要な知識、態度の指導をし、指導する内容がしぜんな関連のもとに全体として正しく学習され、結果としてレクリエーション機能を果たす（望ましい人間形成の一環となる）ように取扱うということであろう。

体育の指導が単なる運動技能の指導、いわゆる「し方、やり方主義」に終わってはならないこ

とはいうまでもない。しかし知識は、それについて最も興味や関心がある時、それにふさわしい内容が与えられてこそ効果的な学習がなされるし、態度も、強い情緒的緊張を伴う場面（危機的な場面）でとられる自主的な行動によってこそ最も確固としたものが形成される。体育で学習者が最も強く関心するのは、何といたっても運動技能である。（直接的には成績や記録に関心をもつであろうが、次にはそれを産出するものとしての運動技能に関心をもつからである）。したがって体育では、運動技能の学習の場における学習者の自主的な行動に応じつつ、知識や態度の指導をすることが最も自然でしかも効果的な方法であると考えられる。

知識の指導にしても態度の指導にしても、運動技能の学習と切り離してそのみを指導しても、殆ど効果がないし、意味もないであろう。

このことは体づくり（身体育成）を強調する場合でも同じことである。勿論身体育成のための運動や方法は、いわゆるスポーツ的なものよりも徒手体操や、サーキットトレーニング、ウエイトトレーニング等、いわゆるトレーニング的なものが有効であることは明かである。しかしこの場合でも、それらの方法が本当に体づくりのために効果あるためには、個々の運動や動作及其回数、速度等の方法が正しく行なわれなければならない。この正しくということの要請はとりもなおさず、技術（技能）を強調していることに他ならない。

このように、体づくりを主眼とする場合でも技術（運動技能）を抜きにしてはなり立ち得ないのである。それゆえ体育で「運動による」ということは実は「運動技能による」ということなのだと考えてよいであろう。運動技能を抜きにしては体育は考えられない。運動技能は体育では学ばねばならない内容の一つであるとともに、体育における学習や指導のいとぐちであり、また、体育でねらう身体的発達、知的情緒的発達を支える（媒介する）機能を果たす意味で、極めて重要なものである。しかしこのことは、決して「体育では運動技能が絶対だ」「体育とは運動技能を指導することなのだ」という

ことを意味しない。体育でねらう唯一絶対のも
のは人間の幸福であり、運動技能は身体的発達、
社会的発達、知的情緒的発達を媒介することによ
って人間（の幸福）を樹立することに協力する
以外の何ものでもない。

(3) 運動技能の学習過程と指導過程

体育の指導では、学習者がしぜんに行なう運
動学習を効果的であるように意識的、意図的、
さらには計画的に手を加え、再構成する。しか
し学習者の自主性や主体性を害さないために
は、できるだけ、しぜんに行なわれる運動学習
の過程に即し、それを教育的にリファインする
ことが望ましい。このような点から体育の指導
過程を運動学習の中核である運動技能の学習過
程に即して考えることは誤りではないのみなら
ず、むしろ本質的なことであろう。他の内容は
この過程に即して考えればよいのであるから。

一般に学習は知覚的学習、運動感覚的学習、
問題解決的学習、感情、態度、鑑賞の学習など
いくつかの型に分けられ、運動技能の学習は書
字、ピアノ演奏などと同様運動感覚的学習であ
るとされている。すなわち、いろいろの知覚と
その反応としての一つ一つの筋肉運動がよく協
応するようにまとめられ、新しい場面の要求に
うまく合うよう主として反復練習によって行な
われる学習であるとされている⁹⁰⁾。たしかに神
経一筋肉の協応が重要な意味をもつ運動技能の
学習では、反復練習による随意運動(意志行動)
の反射運動化が学習全過程の中で大きな比重を
占めることはいうまでもない。しかし、運動技
能の学習は総体的には次のような問題解決的な
学習とほぼ共通した過程をたどることが明かに
されている⁹¹⁾。

熟練の形成の過程

① 動機

② 試行探索（どうすればうまくなるかを考
えいろいろ試みしてみる）

過去の経験が動員される

③ 原理の発見（目的にかなった動作、方法
が分かる。）

④ 練習（いわゆる反復練習）

⑤ 熟練

したがって運動技能を指導する過程としては
一応次のような過程を考えることができる。

運動技能の指導過程

① 提示と動機づけ

何を学習するかを明示（明確化）する。ま
た何のためにそれを学習するかを理解させ、
動機づける。

方法的には示範、話し合い、その他の視聴覚
的方法を用い、充分目的意識を明確にする。

② 試行（探索）

目的を達成する方法（仮説）を実際に運動
を行なわせつゝ探究させる。でたために試み
させるのではなく、過去の経験を動員し、最も
目的にかなった方法はどれかとかいう意識と
か、見通しをもって一回ごとの動作を試みさ
せる。他と協力して行なわせる。

③ 原理の教授

目的にかなった動作がどうすればできるか
を理解、認識させ動作についての正しいイメ
ージを描くことができるようにする。

④ 練習の指導

原理にしたがって描いたイメージが、正し
く身体的に表現できるように練習させる。

練習が正しく行なわれつつあるかどうかを
相互に比較検討評価させたり、教師が観察、
評価、矯正したりして、正しく練習が行なわ
れるよう助ける。

⑤ 評価

どの程度に習熟したかを評価する。

(4) 運動技能の構造と質

運動技能の指導過程は一般的には上のよう
であるとしても、運動技能は運動（種目）によ
ってその構造的な内容及び質・量にかなりの差が
ある。

例えば、体育の教材や学習内容として取上げ
られる運動種目は、大きくは個人的種目、対人
的種目、団体的（集团的）種目に分けることが
できるが、集团的種目はさらに球技のようなゲ
ーム形式のものとダンスのようなゲームでない
ものに分けることができ、個人的種目も、同
時に記録を競う陸上、水上競技のようなコムペ
ティション形式のものと、競技を直接のねらい

としないか、あるいはしても同時にではない（コンテスト形式）器械体操や徒手体操のようなものに分けることができる。そしてこれらの運動の技能の構造的内容を分析してみると極めて大まかに見ても次のような差異が認められる。

運動技術の構造的な内容

運動種目		集団的技能			個人的技能		
		ゲーム	複合的	基礎的	ゲーム	複合的	基礎的
バスケットボール バレーボール サッカー 野球	集団的	○	○	○		○	○
		○	○	○		○	○
		○	○	○		○	○
		○	○	○		○	○
ダンス			○			○	○
すも 柔剣	対人的				○	○	○
					○	○	○
陸上競技 水上競技 器械運動 徒手体操	個人的				○	○	○
					○	○	○
					○	○	○

(図1)

〔註〕 運動技能の分析をどの程度にするかあるいはした方が妥当であるかは学習者の経験や能力と相対的に考えないと無意味なことが多い。ここでは一般的な考察の資料にしようと思ったので一応中学校程度を対象にして分析し、(具体的な運動種目ごとの分析表は紙数の都合で省略)表のように概括した。したがってこの大きな枠組は中学以上の段階にも妥当するものと考えている。バスケットを例にとって説明すれば、個人的技能の中の基礎的要素技能とは、パス、キャッチ、ドリブル、ショットなどであり、複合的要素技能とは、走りながらのパス、ドリブルからのショットなどである。集団的技能とは2人以上で共同して行なう技能を言い、それ自体個人的技能の複合的の意味をもつが、基礎的要素技能と複合的要素技能とに区別される。一つの集団(2-5人)が行なう攻撃(あるいは防禦)の技能は、基礎的要素技能であり、2つの集団間で行なう攻防両要素の加わった(いわばゲームの一部分のような)技能は複合的要素技能である。試合の技能は、これらのあらゆるものを含むと共にさらに、試合運び(チェンジオブペース)などの技能を含む総合的な技能であり、競争形式をとるあらゆる種目に認められる。

対人的種目や個人的種目には基礎的要素技能や、複合的要素技能、試合の技能が含まれるにしても、要するにそれらは個人的な技能に止まる。しかし集団的種目ではそのような個人的な技能の上にさらに集団的な技能が加わっている。そして個人的技能と集団的技能とではやや質が異なる。(後述)このような構造的な内容の相違から技能の量に可成りの相違がある。

さらに運動技能には質的な差異がある。一般に運動技能とは運動の動作を正確になしうる主体的技能を言うのであり、その基礎的要素として、正確、筋力、速さ、持久力、敏捷性、平衡性、動力、柔軟性、協応性、リズムなどがあげられている⁹⁾。どのような運動技能もこれらの要因の影響を受けないものはないことはいうまでもない。けれども運動技能の中には筋力が比較的重要な役割をもつもの、(例えば短距離疾走や跳躍運動、器械運動など)平衡性、協応性、などの神経支配の巧緻性が重要な役割をもつもの(例えば球技やダンス技能などのような)などがあり、これらは同じく運動技能といっても学習効果の現われ方が異っている¹⁰⁾。例えば神経支配の学習効果は比較的早く現われるが筋力は早急には表われない。それゆえ筋力が大きなウエイトを占める技能の獲得や上達のためには、相当長期にわたる継続的な練習が必要になるのである。

以上の点から、個々の運動技能の指導を先にあげた指導過程から考えるのは妥当であるとしても、多くの要素的スキルからなる運動全体の技能を指導する場合の過程は、別の(時間と内容の順序や組み合わせの)観点からさらに検討しなければならないであろう。

(5) 単元の指導過程

指導過程は、一般に、単元の指導過程と一単位時限の指導過程を最も普通のものとして考えることができる。単元の指導過程とは、その単元の内容をどのように、指導しようかということについての見通しを立てた展開過程をいい、一単位時間の指導過程とは、単位時間ごとの授業の展開過程をいうことが多い。単位時間ごとの指導は単元の展開計画によってなされるので

あるから、単元の指導過程は単位時間ごとの指導過程の総和と考えられてよい。しかし順序からいうならば、むしろ単元の指導過程が先に考えられ、それにもとづいて単位時間ごとの指導過程が考えられるべきであろう。

一般に単元の指導過程は導入、展開、整理の三段階に区分され、導入は学習に先立ち、学習者の学習意欲をかき立て、心理的生理的条件を整え、学習態勢を準備する過程、整理は学習の終りに学習したことがらについてのまとめ、整理、反省をする過程とされている¹⁰⁾。しかし導入や整理の段階は広い意味の指導過程には入るけれども、どちらかと言えば管理的な意味が強い過程であるので、展開の段階こそ真の意味の指導過程を意味するといえることができる。そしてこの単元の指導過程で最も大切なことは、内容をどのような順序や関連づけで学習させるかという組合せや、配列の問題である。

例えば中学一年のバスケットボールの単元を指導する場合、個人的技能であるパスやドリブル、ショットなどや集団的技能である2人対1人、3人対2人などをいつ、どこで、指導するか、ゲームをどのように扱うか、順序をどうするか、基礎（個人的技能）→応用（集団的技能）→ゲームとするか、ゲーム→応用→基礎とするか¹¹⁾などの問題である。もちろん具体的な指導過程は運動種目と年齢段階の一般的発達から規定される内容と学習者の具体的な発達、経験、能力などの現実条件、さらに管理的条件などによって決定されることはいうまでもない。しかし一般的にはどのようにあるのが望ましいのであろうか。

内容の組合せや順序については一般に、「運動は一つの機能的全体をなしているので、全体概念を与えないで、直ちに分習から入るのは注入的で学習者の興味や学習意欲を無視することになるので、学習が成立しにくくなる¹²⁾」とか「個々の部分の学習も常に全体との関連及び相互の関係を認識させ、一定の文脈の上で練習させないと無駄が多くて効果がないばかりか、時々には正しい技能や他の技能の習得のための妨害になることすらある。それゆえ、原則として全習（全体技能の練習）から入り、その

補足的なものとして必要に応じて分習（要素的技能の練習）を組合わせ、結局は全習に結合するのが最もよい方法であろう¹³⁾」という原則が適用される。

しかしながら、個人的種目や対人的種目では比較的短時間で全習を行なうことができる一筋力が大きなウエイトを占める技能の質から、一単位時間内の練習やその効果がおのづから制限されることはあるかも知れないが—ので、毎単位時間でも、全習→分習→全習の取扱いが可能であるが、団体的種目（殊に球技）では全習（ゲームを練習する）に可成りの時間を要する上に、指導すべき技能の量が多いので、この原則を具体的にどのように適用するか、また指導の順序をどのようにするかを決定することは、可成り困難な問題である。

けれども先に述べたように技能の構造内容が違う点から、指導過程は少くとも個人的種目と団体的種目（別の言い方をすれば、比較的簡単な技能構造をもつ運動種目と複雑な技能構造をもつ運動種目）とでは、別個に考えた方がよいように思われる。このことは運動技能の内容が高度に分化してくる年齢段階、経験、能力の進んだ段階になればなる程必要になるが、一般に技能水準が上がれば上るほど必然的に要請されてくる。それゆえ、単元の指導過程は（必要な時間は具体的な内容と相関的に決定しなければならないのでここでは正確に考えてはいないが）結論的には次のように考えてよいであろう。

(1) 個人的種目

導入	展		開	整理
	I	II	III	
全習	要素的技能の分習		全習	
	全習			

(図2)

(2) 団体的種目

導入	展		開		整理
	I	II	III	IV	
全習	全習	個人的技能の分習	個人的技能の分集	全習	
		集団的技能の分習	全習		

(図3)

個人的種目の指導過程は図2のようにⅠⅡⅢの三つの段階に分けられるが、全体としては比較的単純で、形の上では反復練習の感が強いものになる。

団体的種目の指導過程は図3のように四つの段階に分けられ(個人的種目と共通の過程をとる段階(Ⅰ,Ⅱ)もあるが)全体としては、可成り複雑な過程になる。球技(バスケットボール)の場合を例にとって説明すると

第Ⅰ段階 全習

球技の技能とは結局ゲームの技能である。学習者に自分達が学習しようと思うゲームの技能(運体全体)がどのようなものであるかについて理解、認識させ、学習(練習)について見通しをもたせる。

① ゲームについて知らせる。

全体概念の伝えさせ方には視聴覚的な方法による場合と、実際に体験させ、筋肉的なものあるいは身体を通して伝えさせる方法とがある。認識は単に知的な方法によるだけでも、単に実践によるだけでも効果は少なく、両者が相互に作用しあって認識が深化するので両方法とも必要なことは言うまでもない。けれども第一に必要なことは行なおうとすることがどんなことであるかを知らせることであるので、先ず実際のゲームを見学させたり、フィルムを見せたり、ゲームやその基礎になる歴史やルールについて説明したりしてゲームを理解させる。

〔註〕導入の段階で行なうこともある。また学習者が大体理解している場合には簡単に認識を整理するだけに留める。

② ゲームを行なわせる。

ゲーム(技能)がどのようなものであるかを筋肉あるいは身体を通して把握させる。

ルールは最も基本的(本質的)な必要最小限のものを協定し適用する。事前にごく簡単にボールのキャッチの仕方等を練習させる必要が生じることもあるが、なるべく早くゲームを経験させ、ゲームを理解させ認識させる。

第Ⅱ段階 分習—全習

ゲームとの関連において個人的基礎的要素技能や複合的要素技能を指導する。

パス、シュート、ドリブル等の基礎的要素技能や走りながらのパス、ドリブルからのショット等の複合的要素技能はゲームがうまく行なわれるために指導(学習)さるべきである。にもかかわらず、これらの技能が抽出され独立して扱われると、学習者は、既成の観念にとらわれて、ゲームとの関連を失った、(ゲーム場面で役に立たない)技能を形成しやすい。それゆえたえずゲームとの関連(防禦者の存在やタイミングなど)を意識して練習させると共に、ゲーム事態で練習させるとか、実用的か否かを検証する機会(ゲーム)を与える。また指導の順序もパス(基礎的要素技能)を例にとれば

① ガードなしで其の場で基本的なパスを行なわせる。

② その場でガードをつけて行なわせる。(2対1, 3対2, 5対4)

③ 移動しつつ、パスゲームを行なわせる。(3対3, 4対4, 5対5)などのように進め、独立したパス自体の完成よりもゲーム事態におけるパスの意識のもとにパスの技能を学習させるようにする。

第Ⅲ段階第一次分習(個人的技能)—第二次分習(集団的技能)—全習(ゲーム)

ゲームとの関連において集団的技能を中心的に指導し、それとの関連において個人的技能を洗練させる。

球技においては単なる「全体一部分」の関係では把握できない「ゲーム—集団的技能(部分あるいは第二次全体)—個人的技能(第二次部分あるいは部分)」といった関係が成立している。すなわち、いくら個人的技能が上手くなっても必ずしもゲームがうまくなるとは限らない。ゲームがうまくなるためには集団的技能(相手や味方の状況を素早くとらえて、自己の在り方を規定し、その通り実行する協力的な能力)が習得されなければならない。集団的技能は、個人的技能がある程度習得されていなければ学習は困難である。いいかえれば個人的技能が基礎になっている。

しかし両者は全く異質のもので個人的技能がいくらうまくなっても必ずしも集団技能がそれ

に伴ってうまくなるとは限らない。集団的技能は集団的技能として集団活動を通じてしか、習得できない。したがって集団的技能も個人的技能と同様、ゲームとの関連を明確に意識するよう指導すると共に、たえずゲームで実用性を検証させ、本来の意味を失わせないようにする。また個人的技能はゲームの基礎でもあるが、集団的技能の基礎でもあり、真に正しい学習は、ゲームや集団的技能に対する認識の深まりによってなされるから、第二段階において一応指導した後も、折にふれ練習洗練させる必要がある。

個人的技能と集団的技能とどちらを先に指導するかという順序については、認識のさせ方は（ゲーム→個人的技能）もしくは、（ゲーム→集団的技能→個人的技能）のように下行的でなければならないが、技能はある程度積み上げを必要とするし、学習者の技能に対する意識も集団的技能に対するよりも個人的技能に対するものが先行するので、技能の練習は（個人的技能→集団的技能→ゲーム）の上行的な方向で行なわせるべきであろう。たとえ最初から集団的、あるいは複合的技能を目指しても個人的なそして基礎的な技能がある程度習得されていないと、良い加減なものになってしまうであろう。

第IV段階 ゲームを指導する。

技能の進歩に伴うルールの設定の仕方、策戦の立て方、チームワーク、チェンジオブペースなどについて実際のゲームを通して指導する。

要するに技能の指導過程で大切なことは、運動全体に対する認識と、個々の神経—筋肉反応の形成とをどのようにして結びつけるかということであろう。全習が短時間で可能なものは、運動全体に対する認識が容易であるのでそれと、個々の神経筋肉反応の形成とがズレなく行なわれ易い。しかし球技のように全体概念の把握が容易でなく、しかもそれが能力や経験を増すにつれて変化（深化）していく種目では、経験や能力の低い学習者ほど、運動全体に対する認識と個々の神経筋肉反応の形成のための練習とが結びつきかねるからである。

それゆえ球技ではなるべく早い時期にゲームを行なわせて、早く全体概念を把握させ、それにもとづいて個人的技能を学習させ、それを再びゲームで検証、実用して認識を深めると共にゲーム自体の認識をも深め、それにもとづいてまた個人的技能や集団技能を学習させ、ゲームで検証させ、それによって一層認識を深めるといようにゲームに対する認識の深化と、個人的技能や集団的技能に対する意識と神経筋肉反応の形成とが相互媒介的になされるようにすることが必要であり、このことが球技の指導過程で最も大切なことであろう。

個々の技能（神経筋肉反応）はその部分を取り出して、分習するのが最も効果的であることはいままでもない。しかしそれが必要であり、どのようにすることが望ましいかを感じとる程にゲーム自体に対する認識の深まりがない場合には、その分習はゲームにとっては無意味なものに終わってしまう可能性が多い。一方ゲームに対する認識は結局、ゲームを見たり行ったりする以外には深化の方法はない。したがって一回ごとの時間は多くなくてもよいから、できれば毎時間でもゲームを行なわせるべきであろう。パス、ドリブル、シュート、フットワークなどの要素的技能の指導が終わってから、はじめてゲームを行なわせ、一単位15時間の中でゲームは終わりの3時間しか行なわせないとこのような球技の指導過程は、体育の指導としては望ましくないであろう。

対人的種目については、技能的発達(技能分化)の程度が低い段階の学習者に対しては個人的種目に準じ、高い段階の学習者に対しては団体的種目に準じて単元の指導過程を考えればよいであろう。

(6) 一単位時限の指導過程

一単位時限の指導過程も最も普通には単元の指導過程と同様、導入、展開、整理の三つの段階に分けられる。しかしながら導入及整理の段階は管理的な意味が強い。例えば導入の段階での主な内容は⁹⁸⁾、方法は別として、

- ① その時間の学習の目あて、学習の仕方などについて理解させ、その時間の学習の見とお

しをもたせ学習意欲を喚起する。

- ② その時間の学習の生理的・心理的準備（準備運動）をさせる。

の二つである。また整理の段階の主な内容は次のようなものである。⁽⁹⁾

- ① 生理的・心理的調整
- ② その時間の学習活動を反省させたり、整理させたりして次の時間の学習の計画をさせる。

したがって本当の意味の指導過程の問題は展開の段階の取扱いにある。そして単位時間の展開の段階で取扱う内容は単元の指導過程（広義）、すなわち導入の段階であるか、展開の段階であるか、整理の段階であるかによって、凡そ内容が決定されているので、単位時間の指導過程（展開の段階）もこれに応じて変ることになる。しかし単元の導入の段階や整理の段階の指導過程はあまり問題はない。例えば単元の導入や整理の段階では、つねに次のような内容が含まれるからである。

導入の段階⁽¹⁰⁾

- ① 単元の内容と学習計画について説明し見通しをもたせる。
- ② グループ編成の係の決定
- ③ 学習に必要な事項の打合わせ

整理の段階⁽¹¹⁾

- ① 運動を通してのまとめ、グループ対抗の試合、競技会（記録会）、発表会（見合う）
- ② 話しあいによる反省、記録の整理

結局単元の展開の段階の指導過程だけが問題になるが、ここでも団体的種目か個人的種目かにより、また団体種目でも球技（競争を伴う）かダンス（競争を伴わない）かにより指導過程は多少異なる。しかし最も複雑な過程を必要とするものは球技であり、しかもその第Ⅲ段階であろう。しかし第Ⅱ段階は個人的種目とも共通する点が多いので、ここでは球技（単元）の展開の第Ⅱ段階及第Ⅲ段階に当るそれぞれ一単位時間の指導過程について述べることにする。

(A) 第Ⅱ段階（個人的技能あるいは基礎的技能を指導する段階）の指導過程

結論から先に言えば、指導する技能（個人的あるいは基礎的）の数に応じて、（提示—試行—原理の教授—練習指導）のサイクル過程を繰返し、最後にゲームを行なわせるということである。したがって指導する個人的（基礎的）技能が1つの場合には次のようになる。

導入	展 開			整理
	提示	試行	原理教授 練習、指導 観察、矯正、 評価	ゲーム 実用性の実証 認識の深化

(図4)

指導する技能の数が多い場合は、その数に応じて（提示→練習指導）のサイクルが繰返されると時間がかかるので、提示と原理の教授が続いて行なわれ、試行と練習指導が同時に行なわれる短いサイクルで繰返されることもある。しかしこの場合は教師中心の一斉指導になり易いので、全部をこのように扱うことは望ましいことではない。

基礎的要素技能の学習は、どこまでやったらよいというそれ自体の到達目標が設定出来るものではなく、結局はゲームの技能と相対的に判断する以外には用途のつけようがない。したがって最初は正しい要領（指導者の経験で判定する）が大体会得されたらよしとし、一時に余り時間をかけるよりも短時間ずつでも多くの機会（新しい技能の学習に入る前など）に練習させ、ゲームに対する認識の深まりを背景に洗練するようにする。

ゲームはその時間に学習した技能の実用と正しさの検証、認識の深化及びゲーム自体に対する体験と認識の深化を意図して行なわせる。したがって場合によっては趣旨に沿う他のリードアップゲームに代えられてもさしつかえない。
(B) 第Ⅲ段階（集団的技能を指導する段階）の指導過程

本質的には(A)と変りはない。唯扱われる内容が ①個人的技能 ②集団的技能 ③ゲームの三つが含まれるので、重点の置き方や順序が問

は題になる。結論的に次の通りである。

導入	展 開					整理
	個人技能	集 団 技 能			ゲーム	
	練習指導	提 示	試 行	原理教授	練習指導	検認の 深 証識化

(図5)

指導の重点はもちろん集団的技能に置く。扱う技能の数は1つに限るわけではないが、集団的技能は学習にかなりの時間を要するので、実際には多くを扱うことは困難であろう。要するに扱う技能の数ほど技能指導のサイクルを繰返し、ゲームで実用を検証し、また、ゲームやゲームと要素技能との関連についての認識を深めることはIAIと同じである。

指導する順序は個人的技能→集団的技能→ゲームで、個人的技能は既修のもので、この時間に指導する集団的技能で特に必要な要素(補助的)となるもの2-3をとり上げ、ごく単時間復習をかねて技術的な演練をはかるのである。

あ と が き

体育は身体を通しての教育であるとか身体活動による人間形成であるとかいっているが、現実に体育教師がしていることは運動技術(スポーツ技術)の訓練だけではないか、技術主義ではないかという批判を耳にする時、その批判の妥当性を一面では肯定しつつも、他の一面では自己の経験から、また他の多くの人の経験を見たり、聞いたりして、運動による人間形成を実感をもって肯定するというのが私のいつわりのない気持であった。そして一体このような批判や実感のわく根拠は何処にあるのだろうか、又本当に運動を通して人間形成をするためには具体的な一時間一時間の体育の授業の指導は一体どのようにしたらよいだろうか、あるいはすべきだろうか、という長い間の素朴な、しかし自分では本質的だと考えている疑問に対する、現在の段階の、極めて粗雑ではあるが、いつわりのない回答がこの小論である。

そしてここで体育は、運動を通して行なう以

上、運動技術(技能)あるいは運動文化の獲得と追究の過程を無視することはできない。否非常に重視しなければならない。いろいろな批判の生ずるのは運動技術を指導すること自体に問題はなくて、むしろその運動技術(運動文化)がどのような種類のものであり、またそれがどのような意図や立場から選ばれるかということ及びどのようにして学習させられるかという指導方法にあるのだと、いったつもりである。

そして一時間一時間の指導がどのような構想の下に行なわれるべきかということについて多少を明にしたつもりである。しかしながら指導過程は主として私の経験にもとづいたもので厳密な意味の実証的研究の過程を経ていない、いわば仮説のようなものである。また非常に密接な関係のある指導形態についてはあまりふれていないが、助け合いによる自主的学習の指導でなければならないことは暗示したつもりである。御叱正をお願いする次第である。

参 考 文 献

- (1) 小林晃夫 スポーツによる精神的変化
「体育の科学」12号, 1961.
藤江学等 幼児の運動能力と人柄
「体育の科学」12号, 1961.
- (2) 小林晃夫 前掲書
- (3) A.Lasalle : *Guidance of Children though*
P. E. 佐々木石田訳, 逍遙書院,
昭26.
- (4) 今村嘉雄 「ソ連の体育とスポーツ」大修館, 昭33.
富山 清
- (5) G. D. バトラー 「レクリエーション総説」
三隅達郎訳 ベースボールマーガジン社 昭37.
C. A. Bacher : *Foundotion of physical*
Education 江橋慎四郎訳, 体育
の科学社, 昭37.
- (6) 生活科学調査会「スポーツの社会学」 医師薬出版, 昭37.
- (7) 中村敏雄 「水泳の技術指導の問題点」 体育グループ, 17号, 学校体育研究同志会.
- (8)(9) 小林晃夫 前掲書
- (10) 松田岩男 「学習指導の問題」 保健体育学講座V,
昭36.
- (11) 松井三雄 熟練形成の径路について(1)(2)
小林晃夫 「体育学研究」 第2巻第6号, 第3巻
第1号.

体育の指導過程についての一考察

- (12) 松田岩男 「運動機能の分析」
(13) 松井三雄 「体育心理学」 p. 141, 杏林書院, 昭27.
(14) 文 部 省 「中学校保健体育指導書」 p. 280.
(15) 小林亮一 「球技技能の把え方とその指導」 「第10
次日教組教研究大会報告書」 1961.
(16)(17) 松井三雄編 「スポーツの心理学」 p. 143. 同文書
院.
(18)(19)(20)(21) 宇上正彦 グループ学習の指導 「体育の科
学」 1961, 10号. p. 495, 498, 496,
498.

〔その他の参考文献〕

- 竹之下休蔵 体育の教授過程と問題点 「体育教育」
1962, 6号.
前川江橋等 体育科教育 「杏林書院」 昭36.
竜野 準一 体育科の学習過程についての一試案
「体育の科学」 1961, 2号.
林 慶介 「体育科における指導過程の考察」 1963
城丸 章夫 「体育の授業研究」 明治図書, 1961.
正木 健雄 「日教組12次研究全国県会報告書」
W. オコン 細谷、大橋沢 「教授過程」 明治図書,
1959.

(昭和38年9月5日受付)